

# 論文の内容の要旨

論文題目            ヨーロッパ文明批判序説  
                          —植民地・共和国・オリエンタリズム—  
  
氏 名            工 藤 庸 子

本論攷は、「地域文化研究」という学際的なディシプリンに向けて、「文学研究」の専門性を開いてゆく試みとして執筆された。その方法論的な指針と目標は、以下の通りである。

・**「国民文学研究」という制度的な枠組みをこえる**：伝統的な「フランス文学研究」は、「文学史」によって顕揚された「国民的作家」のモノグラフィーを基盤としてきたが、これに対して筆者は、複数の作家を向きあわせることにより、新たな問題系を導くことができると考えた。また、その際に、国籍・時代・ジャンルによる分類の枠組みをこえて、たとえば『ポールとヴィルジニー』については『ロビンソン・クルーソー』とブーガンヴィルの航海記を読解の補助線とする、あるいは『ドン・キホーテ』と『フランケンシュタイン』のなかにあらわれるイスラームの娘とキリスト教世界の青年との愛のエピソードを比較対照することが有効であると考えた。

・**参考文献の専門領域を開く**：文学研究における先行論文にとらわれず、それぞれの問題構成にしたがって、歴史学や民族学や人類学の文献を参照した。「奴隷制」については、旧植民地の発言をふくむ最新の研究成果から、また「国民国家」の意識形成については、歴史論文集『記憶の場』から、今日的な解釈の手法を学びとることができた。複数のディシプリンの交錯する場でテクストを読み解くことは、本論攷の掲げる課題のひとつである。

・「**歴史的事実**」の検証ではなく、「**言説自体**」の分析をめざす：文学テクストを歴史的事実の記録文書とみなして解説することは、筆者の意図するところではない。そうではなく、事の始めから「言葉の装置」として立ち上げられる小説などの文学作品が、「文明」や「国民」や「人種」や「他者」をめぐる集合的ファンタズムを反映し、同時にその形成に寄与する現場を検証することが、基礎的な作業となっている。ミシュレの歴史やルナンの宗教史、さらには『19世紀ラールス大辞典』なども、同様の視点から分析の対象となる。制度的な学問が「文学」として囲い込んだ領域と、その外部を隔てる境界は、こうしたアプローチにおいては消去されており、分析対象のレベルでも、専門性を開くことができたと考える。

・「**文明**」の概念を歴史的に再構成する：自明のように流通する「文明」という語彙に、一定不変の実態が対応しているはずはない。これが出発点の問題意識である。18世紀の旅行記から19世紀末のアーリア賛美の言論に至るまで、この語に反映された世界観の構造が、徐々に変容してゆくさまを、具体的に描きだすことが、まずは要請されると思われた。ここで対象を捉える視座は、あくまで世界認識の水準に設定されており、それゆえ歴史的事実の生起を年代順に追うという論述方式は、あえてとらなかった。「文明」という語が想起させる様々の風景を、個別的に描出し、その全体を構造化して提示することが、本論攷の目標である。

＊

以上のような方法論的前提に立ち、本論攷は「文明の意識」の生成と変容の経緯を問いなおす。第Ⅰ部は、「古い植民地」を舞台としたベルナルダン・ド・サン＝ピエールの小説と旅行記、そして「奴隷文学」と歴史学の論文などを読み合わせ、啓蒙の世紀から19世紀半ばの奴隷制廃止までを論じている。第Ⅱ部では、ミシュレの歴史、ユゴーの小説、ラールスの大辞典などを中心に、革命以降、「ナショナル・ヒストリー」や「国民文学」が立ち上げられ、それとともに共和主義的な「国民感情」が形成されてゆく過程を考察する。第Ⅲ部では、「新しい植民地」となるイスラーム圏とアジアに照明が当てられる。冒頭にフローベールを引いて、知の言説としての「オリエンタリズム」に注目し、さらに、ミシュレの著作においてアーリアの起源ガンジス河とセムの一神教を育んだ地中海世界とが対立的に記述されてゆくさまを見る。イスラームを主題とする文学テクスト、ヴォルテールの哲学的寛容論、ルナンの宗教史へと分析を展開する結論部分は、現代世界の問題へと接続するものである。

1870年代のフランスは、はじめて安定した「共和国」の体制を築き、「植民地帝国」への道を邁進する。この時点におけるヨーロッパの世界認識は、ひとつのプロトタイプ（原型）とみなしうるものではないか。いいかえれば、第三共和制初期の文明論的な見取り図から、現代の地球をおおう混迷の淵源を、あぶりだすことができるのではないか。イスラ

ーム世界とキリスト教世界との対立と齟齬——いわゆる「文明の衝突」——の雛形が、ここには潜在すると思われた。本論攷が「序説」を名乗るのは、欧米諸国が世界を制覇する基点から今日に至るまで、1世紀にわたる圧倒的な一元化のプロセスを検討の埒外としたためである。

それ以前、ほぼ2世紀をかけて、「文明」の意味するところは、「自然」や「野蛮」と対立する概念から、「進歩」と「停滞」という時間軸の発想へ、さらには制度的な「ライシテ」（非宗教性）と矛盾なく共存しうる「キリスト教文明」という了解へと、徐々に変貌してきたように見える。だが、そこに認めるべきは、本質的な転換というよりむしろ、ヨーロッパがその「外部」と対峙して、これを負の対蹠地と名づけ、そのことにより己を「文明」として定立するための、絶えざる運動であるのかもしれない。じっさい「非キリスト教世界」に対し、「野蛮」と「停滞」のイメージが付与されるというメカニズムそのものは、時をへて矯正されはしなかった。そのことは、サイードの『オリエンタリズム』が、「西欧による抑圧と支配の様式」と呼んで夙に批判したとおりである。しかしながら、すでに学問的な「権威」とみなされて、異論の余地なき告発のシステムとして援用されることもあるサイードの理論を迂回して、みずから文献をひもとき思考することは、本論攷の基底をなす選択でもあった。

＊

境界を定められた学問研究への違和感が本論攷の推進力であるために、考察の主題や領域も、収斂するよりは、おのずと繁茂し拡張していった。したがってこの「要旨」では、各章のレジメを併記するのではなく、「地域文化研究」にむけた問題提起となりうる具体的なトピックの一例を抽出し、その骨子を示しておきたい。

・**アジアへの視線と「われわれ」の立脚点**：19世紀の半ば、イギリスとの植民地争奪戦で敗退したフランスが、インド亜大陸を放棄してインドシナ半島に侵出し、新たな「トポス」として東アジアに照明が当てられる。「極東」「黄色人種」「仏教」などの語彙が、にわかには浮上するのも、この時期である。異形の神々を祀る壮麗な遺跡の数々が発掘されたとき、ヨーロッパはそこに「文明の死」という主題を見出した。かつてヨーロッパからアジアへと投げかけられた視線を、このような時代的展望のなかで再構築することにより、考察の主体である「われわれ」の立脚点を明確にできるのではないか。こうした文明論を背景に置き、マルローやロティの描いたアジアを再考することも可能だろう。長い伝統のある日仏文化交流論、比較文化論とは異なるパラダイムの提案である。

・**アーリアとセム**：ガンジス河の畔こそ、最も輝かしい「文明」の揺籃であり、高度なる「哲学」の起源の地であるとする「アーリア旋風」は、1820年代の終わりにドイツからフランスへと伝播した。新しい知的潮流の基盤となったのは、18世紀に成立した「オリエン

タリズム」(東洋研究)、なかでも諸文明の言語研究である。ヨーロッパの母胎である「光のアーリア」を称揚する文明論は、「闇のセム」という対概念を導入し、しだいに巨大なイデオロギー装置へと成長していった。

・**イスラームに対峙するヨーロッパ**：キリスト教世界が、イスラームとほぼ拮抗する勢力となったのが、16世紀末、そこから徐々に力関係が逆転し、ついにはヨーロッパ列強によるオスマントルコ帝国の解体にまで至る。18世紀まで健在であった「他者に寛容なイスラーム」というイメージが暗転し、「不寛容な専制君主制のイスラーム」という形容が定着するのは、「君主制」を廃したのちのフランスにおいてである。

・**「キリスト教文明」というアイデンティティ**：ナポレオンの文明論は諸宗教を相対化して捉える啓蒙思想を受けついでいたが、ルナンにおいてキリスト教は「ヨーロッパ文明」の前提かつ目標となる。ライシテの時代にふさわしい民主主義的な宗教は、いかなる制度とも結ばず、個人の信仰生活のなかで全うされるはずであり、これはセム的な宗教のあり方を反転させたものにほかならない。それゆえ「アーリア化されたキリスト教」のみが「文明」の名に値する。以上のようなルナンの宗教史的展望によって、イスラームを政教分離の適わぬ「非文明」として否定する立場は、すでに周到に理論化されている。

さながら普遍的価値であるかのごとく流通する「文明」という概念も、これを運用する「文明史」の学問的な実績も、じつはキリスト教世界が「国民国家」を形成する過程で育まれた固有の思考であることを、あらためて確認しておこう。

「ヨーロッパ文明」をめぐる言説は、しばしば、遍在する不可視の権力のように機能する。これが本論攷の考察した命題であり、論証の過程において、フランス語のテキストは、対象とのあいだに批判的な距離を導き入れる手段ともなった。しかしそのために、「文学」が筆者におよぼす魅惑は、いささかも減じはしなかった。慣例にしたがって、一方には「文明批判」、他方には「文学批評」という日本語を当ててみたものの、本来 *critique* という一語には、誘惑と快樂の原則がこめられている。そのことを筆者は、ほかならぬ「フランス文学研究」から学んだのだった。